



フランス・Bramの円村(解説p.19)

フランス南部の円村

(写真：フランス／Bram 帝国書院 2009年9月撮影)

フランス南部、スペイン国境に隣接する地中海沿岸のラングドック・ルシヨン地方には、幾何学的な円形の集落、いわゆる円村がいくつも見られる。この写真の集落Bramもその一つ。市街地の中に見事な円形の集落が残されている。教会と広場を中央に置き、それを取り巻くようにして民家が並ぶという独特の形態には、それ相応の曰く因縁がありそうである。

しかし、その成因はあまりよくわかっていない。円村は広く世界各地に見られる集落形態であるが、とくにヨーロッパではドイツ北部のエルベ川下流域のものが知られている。中世におけるゲルマン人とスラブ人の居住域の境界地帯に分布することから、防衛のために円形になったと考えられている。数戸の農家が中央の広場に向かって相対しており、中央の広場ではかつて外敵から避けるために夜間に家畜が集められたという。

これに対してフランス南部の円村は、中央の教会の周囲に家屋が幾重にも同心円状に密集して並んでおり、しかもドイツの円村よりはるかに規模が大きい。最も外側の家屋は互いに接しており、建物があたかも市街地を取り巻く壁のようになっている。Bramの歴史を紐解くと、中世に南フランス一帯を拠点にして勢力を強めたキリスト教異端のカタリ派が、13世紀初頭に

アルビジョワ十字軍によって制圧された際、ここで地獄のような殺戮があったという。その悲惨な歴史を語る景観は残されていないが、円形の集落は外敵の侵入にさらされてきたこの町の来歴を今に伝えているのかもしれない。

この一帯は、地中海と大西洋を結ぶルート、すなわち地中海沿岸のローマ都市ナルボンヌからオード川をさかのぼり、トゥールーズを経てガロンヌ川を下り、ビスケー湾へと抜けるコース上に位置し、ローマ帝国時代以来、戦略的にも重要視されてきたところである。Bramの集落より東に約20kmのところに位置するカルカソンヌは、古代ローマ帝国にさかのぼる堅牢な要塞都市で知られ、その歴史的遺構が1997年にユネスコの世界遺産に登録されている。ここに分布する円村も要塞都市も、そうした地理的背景と関わっているのだろう。

周辺の農地では、小麦などの穀物や野菜と並んで、かつてローマ人が持ち込んだブドウ栽培が広く行われており、良質のワインの産地になっている。また、観光も盛んで、歴史的都市や農村での休暇を求めてフランス北部やドイツ、イギリスなどから多くの観光客を集めている。円村も歴史的な景観として、その整備が積極的に進められている。

(東京学芸大学教授 加賀美雅弘)